

### <研究>東京湾における海苔養殖地域の労働力 について

大和, 裕子

---

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理

(巻 / Volume)

4

(開始ページ / Start Page)

62

(終了ページ / End Page)

66

(発行年 / Year)

1956-05-01

(URL)

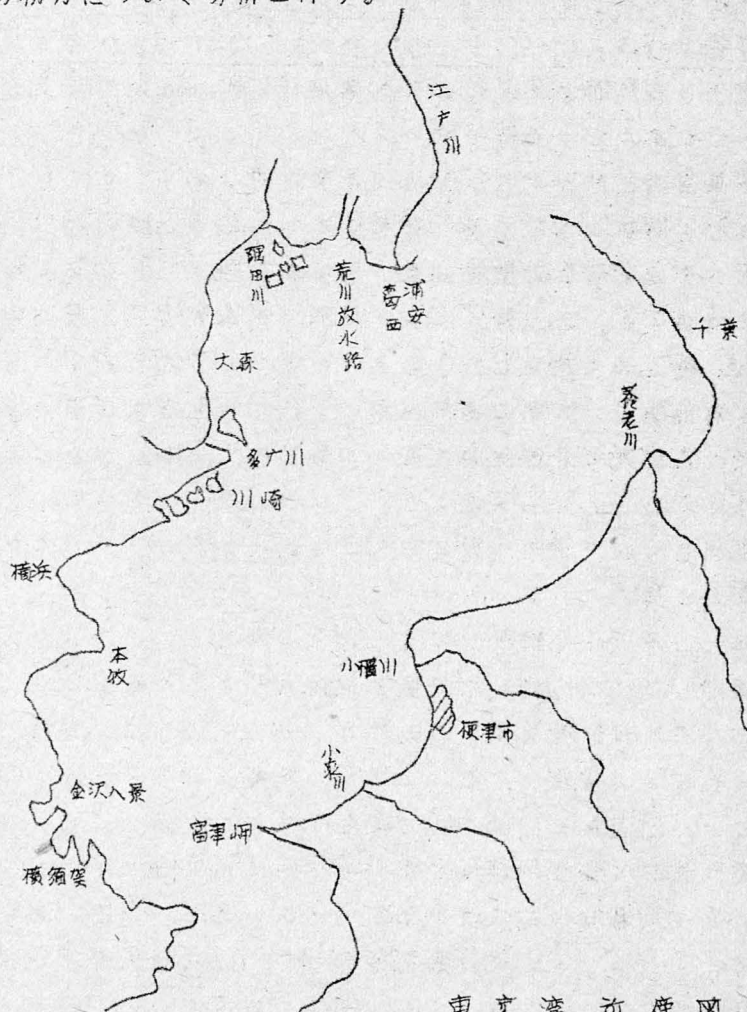
<https://doi.org/10.15002/00026568>

# 東京湾における海苔養殖地域の労働力について

天 和 裕 子

## 序

我が国における正画漁業産の分布をみると、(1) 仙台湾、(2) 気仙沼湾並傍、(3) 東京湾、(4) 伊勢海、三河湾、(5) 瀬戸内海、(6) 有明海の6地域に約94%集中している。東京湾地域では、正画漁業産の中での種漁業は7%、その種漁業である貝養殖は28%をしめている。海苔養殖はその種漁業に含まれているが、これの行われている地域は富津岬以北の千葉県、東京都、金沢附近以北の神奈川県沿岸一帯の内湾地域である。東京湾における海苔養殖産の成立、発展については別な機会に報告してある。<sup>②③</sup>ので本稿においてはとくに労働力について分析を行う。



東京湾並傍図

東京湾地域では漁業者の3割が海苔養殖を行っているが、専業として営んでいるのは大森その他2、3の地域のみ見られ、他は漁撈、海苔以外の養殖業、農業、商業等その他との兼業によつて営んでいる。

海苔は季節的な生産物であり、農家の冬の副業として家計補助的な意味でとりあげられ発展したものである。このことは東京湾の他に仙台湾、④三河湾でも同様である。海苔養殖の作業は準備期を入れて8月より翌年の4月まで行われる。農繁期と漁家のずれ、労働力の時間的融通性、家族小経営、海苔養殖業の不安定性などの理由が、大部分農業と兼業で、換言すれば農業より分離し得ない存続している。

海苔養殖漁家の家族人員は平均6~7人である。(オノ表)

オノ表 海苔養殖漁家家族人員(東京都)

家族人員	1人	2	3	4	5	6~7	8-9	10人以上
百分率	0.9%	2.4	6.1	11.7	13.9	36.5	20.9	7.0

(註) 東京都水産課による全漁家1/5抽出調査の結果による。一世代平均6.2人。

海苔養殖業に投下される労働力は季節的であり、しかも漁家の各戸毎に家族の労働人員数により、更に資本や水に伴う経営規模によつて異なる。海苔そのものの採取、製造は低い技術の段階にあり、手工業的技術の熟練の存続を必要とし、個人経営による零細な家族労働を基盤として成立する。

海苔養殖等の専業の場合と兼業の場合の労働力の値と量から考察すると、まず専業者の多い大森の専業漁家について月別操業日数、労働内容をみると、沖作業と陸作業とが組合わさる。公休日は「小潮」の日に当り、5日に1回の割合である。しかし天候に左右されるので沖、陸作業も一定していない。準備期間も入れて同年の操業となつている。なお1日の投下労働時間は8~10時間を要している。

これら漁家の年令構成をみると(オノ表)、20年代の青年層が意外にも多数従事しているのは一面海苔生産性の高さを物語るともいえる。

つぎに兼業海苔養殖漁家の労働力の分配をみると、海苔の季節には自家の労働を最大限に必要とするのに対し、季節外には家族の一部には労働量の過剩をまじ、出稼あるいは行商に転化するものがある。

漁業法改正以前は柵網は自家労働力とにらみ合わせて割当をうけていたが改正以後は漁場は一応平均に分配されることになつた。聴取りによると、改正以前に100~200柵の経営を行つていた大森の専業漁家では、改正以後の割当は平均36柵である。しかしこの程度のみで経営を行つているという

表2 海苔専業従事者耳令構成

	実数	百分率
19才未満	7人	14%
20~29	12	24
30~39	4	8
40~49	15	29
50~59	8	16
60才以上	5	10
計	51	100

ことは到底考うれない。そこで集法による「他浦宿」ということを行われている。故に形式的な割当棟数によつてのみでは至営規模は不明である。

しかし特殊な例としてここにとりあげる問題は雇傭労働者の性格である。専業の場合には単に家族労働力だけで小規模至営を行うものと雇傭労働力を用いて至営を行

うものとかある。(もちろん兼業の場合でも至営棟数に対する家族の不足労働を補充する意味で相当の雇傭も見られる。)大森についてみると、季節的に1,200人前後の男女の出稼労働者を雇うといわれる。男子は沖作業、女子は乾子として作業に従事するのであるが、山形、千葉、長野、埼玉などの農閑期を利用する出稼者である。(表3)

その前職は農家が多いが、千葉で養殖業に従事しているものもある(千葉

表3 海苔専業漁家の漁船、乾場労働力(大森)

漁家番号	1) 用船数		乾場	家族従事者数		雇傭従業者数及従事年数	
	動力	無動力		男	女	男	女
1	2隻	4隻	500坪	1人	1人	2人 { 3年 <sup>◎</sup> 4年 <sup>◎</sup> }	2人 { 1年 <sup>△</sup> 3年 <sup>◎</sup> }
2	2	5	600	1	3	3 { 10年 <sup>◎</sup> 3年 <sup>◎</sup> }	1-3年 <sup>△</sup>
3	3	5	400	2	2	2 { 3年 <sup>◎</sup> 5年 <sup>◎</sup> }	1-2年
4	1	3	312	2	2	1-1年	
5	1	3	285	2	2	1-3年	
6	1	2	336	2	1	1-2年 <sup>◎</sup>	1-3年 <sup>△</sup>
7	1	2	115	2	2		
8	1	3	300	4	3		
9	-	2	59	2	2		
10	-	2	86	2	1		
11	-	1	53	1	1		
12	1	4	132	4	2		
13	1	2	36	3	1		

1) 聴取調査による 2) ◎ 印常雇 △ 印千葉県出身 4) 雇傭者中千葉県出身以外は全部山形県出身

奥青垣附近では戦前この地方の海苔が早く仕上るので大森へ300人近く出稼をしていた。また、地元の婦女子を乾子として雇う場合も相当ある。雇傭労働の中、とくに男子の年令構成は20才台が多いことは注目すべきである。

これらの雇傭者の性格については一層の研究を必要とするが、一般に海苔専業経営者にとつては季節的漁業によつて半農型労働者の使用を容易に受け入れ安価な費用期労働力を利用して経営を有利にしている一面のあることも考えられる。海苔養殖経営に当つて、このような労働内容をしめているか、ここに一つの問題となるのは戦前、阿屋との組合わせて成立していたことである。副業的乃至専業的養殖に当つては極めて巨額な資本を必要とする。(男女表)そこで旧人経営であり、家族労働力を支配するものであり、ながら資本によつて、経営規模も大となり、また小となり、投下される労働力も異なってくる。ここに戦前、阿屋が資本、資材、労働力の世話役として買占資本を投入しつつ養殖漁家にくいこんでいた事が考えられる。現在は漁業者の自覚に伴つて資金面における阿屋への依存度は極めて少なくなつてきた。

#### 結 語

要するに海苔養殖等は季節的、副業的性格をもつたものであり、過去において阿屋別家内工業的性格を基底にして発展してきたのである。これが企業化され、家内工業から発展することが出来ず、旧人的家族労働力に依存しつづけている。それには浪場の場訓制度の果たす役割も見逃すことは出来ない。(1956.4.10)

#### 参 考 文 献

1. 大和裕子：東京湾における海苔養殖地域——労働力について——  
1952年度 日本地理学会春季大会発表
2. 玄川(現大和)裕子：東京湾における浅草海苔養殖について。  
社会地理28号 1950
3. 大和裕子：内水面の利用——東京湾における浅草海苔養殖地域。  
現在地理講座文7巻所収 1956(未刊)
4. 大和裕子：仙台湾における海苔養殖地域 1954年度日本地理学会春季大会発表
5. 並瀬庸男、八木正昭：海苔養殖業の性格——愛知県前芝村調査報告——  
東京大学農学部農学経済教室 1953

文々表海苔養殖資材金額(川崎)

品目	基準に対する 小冊 二耐用年数	イ	イ	口	ハ	ニ	イ	口	ハ	ニ
建込資材		帆	大	張	10,000 (5)	資	物	枚	500 (2)	
場割日串	20冊	小	小	"	500 (5)	5	乾燥資材			
周	30間	ト	ト	"	10,000 (5)	運	搬	筐	300 (2)	
筆	組	作	業	衣	300 (1)	置	台	材料一式	300 (3)	
標	巻	探	碇	張	1,200 (2)	乾	燥	瓦	150 (4)	
船	"	コ	イ	ル	700 (2)	日	上	串	100 (10)	
金	丁	ハ	一	ム	500 (2)	乾	燥	瓦	130 (3)	
木	台	3	採取	資材		乾	燥	場	20,000 (20)	
支	冊	牛	繩	張	50 -	ス	ト	一	4,500 (5)	
取		ア	心	リ	20	石	炭	七	9,000 -	
錠	(3)	目	板	ワ	10 (3)	木	炭	炭	400 -	
錠	(3)	鉄	"	"	150 (2)	煙	道	道	2,000 -	
バ	(3)	邊	印	"	200 (3)	6	社	上	資材	
ゴ	(2)	名	孔	"	4 -	ハ	う	う	10 (8)	
"	(2)	兼	繩	"	20 -	ノ	リ	箱	1,000 (10)	
"	(2)	浮	竹	"	400 -	"	"	"	300 (10)	
木	(2)	竹	炭	"	400 -	ス	之	の	煙	
ノ	(2)	針	金	"	80 -	棧	動	船	最	
ノ	(2)	針	金	糸	50 (2)	"	"	最	低	
ノ	(3)	4	製造	資材		軽	油	20	20	
手	(3)	塩	体	張	500 (3)	重	油	升	100 -	
手	(3)	叩	キ	台	2,000 (5)	カ	ソ	リ	升	
手	(5)	包	丁	ツ	1,000 (8)	自	転	車	20,000 (3)	
力	(2)	動	力	A	35,000 (8)	リ	ヤ	力	16,000 (3)	
力	(3)	"	B	"	15,000 (8)	万	力	力	1,500 (5)	
ゴ	(1)	振	動	力	8,000 (8)	シ	マ	ベ	ル	
軍	(1)	流	台	"	800 (5)	ブ	キ	"	800 (3)	
手	(1)	ス	キ	匠	100 (2)	ツ	キ	キ	500 (5)	
前	(1)	ス	キ	箱	30 (2)	網	具	"	1,300 (2)	
ト	(4)	桶			1,000 (3)	外	力	船	耐	
ゴ	(3)	吸	上	ホ	4,500 (5)	ウ	イ	ン	チ	
ヤ	(10)	ツ	ル	ベ	300 (2)	置	ア	シ	台	
水	(5)	海	苔	等	1,700 (2)	置	ア	シ	機	

(注) 神奈川県水産調査による。